

【学生フォーラム】

愛知産業大学造形学部建築学科における同好会の活動

～建築同好会とACT（アクト）～

愛知産業大学造形学部建築学科 有馬百香 柴田匠 平賀美希

【要旨】

愛知産業大学造形学部建築学科における同好会活動の取り組みと建築設計コンペティションに出品した建築設計作品の紹介をします。

1. 愛知産業大学造形学部建築学科の同好会活動

愛知産業大学造形学部建築学科には「建築同好会」と、「ACT」正式には「アーキテクトコンペティションチーム」という2つの同好会があります。授業時間外でも建築をより深く学び、他学年とも交流できる場になっています。

2. 建築同好会の活動

建築同好会では現在建築学科の学生約40人が所属しています。活動内容としては毎年新生歓迎会と夏の研修旅行をメインとして活動しています。顧問の建築学科学科長新井勇治先生のもと日本各地の建築を実際に見に行っています（画像1）。

過去の研修旅行先としては東京、愛知、静岡、京都など様々な場所に行きました。見学先は学生の要望を先生がくみ取って計画してくれます。新しい建築から古い寺社仏閣まで幅広く見学しています。

2019年度の新入生歓迎会は5月に岐阜県にて日帰り研修を実施しました。まずは安藤忠雄さんの長良川国際会議場を見学しました。「金華山と長良川を建築の一部として取り込み自然と調和した、岐阜にしかないものをつくりたい」という発想のもとに安藤忠雄さんが考えた面白い構造でした。普段開放していない会議室にも職員の方のご厚意で入らせていただきました。次に、伊東豊雄さんのみんなの森ぎふメディアコスモスに行き、木製の格子屋根が特徴的でした。中に入るとグローブと呼ばれる透過性のある傘のようなものが釣りさがっており、空間を緩やかに区切っています。学生達は楽しみながら館内の散策をしていました。

今回の新入生歓迎会では卒業した先輩方が一緒に参加してくださいました。解説をしていただき、より理解を深めることが出来ました。建築を見るだけでなく、実際に働く社会人と学生が交流を深めることもでき、貴重な研修になったと思います。

次に、大学の長期休み期間を利用して1泊2日の金沢研修旅行を計画しました。金沢では海の幸も堪能しながら現代建築と古き良き町並みを見学しました。ひがし茶屋街では町屋の見学もしました。今回の研修は、谷口吉郎・吉生記念金沢建築館がオープンされることに合わせて石川県を研修先として選びました。洗練された建物が町並みと調和していました。

大学生という時間があるときだからこそ建築同好会では実際に見て感じる自分の感性を伸ばしていく同好会です。また、建築同好会は建築を見に行くだけではなく、学生が情報収集をする場でもあります。教室などに展示されている建築模型から盛り上がり、先輩後輩で交流しながら実際に模型制作で使える技術や道具のについて話し合う場にもなっています。今後も同好会活動を通じて幅広い建築への学びを深めていきたいと考えています。

3. A C T (アーキテクトコンペティションチーム) の活動

ACT では、学内外で開催されている建築系の設計コンペティションに毎年取り組んでいます。今回は、実際に私たちが制作した作品を紹介いたします。「POLUS—学生・建築コンペティション—」に出品し佳作を受賞した「柵道のある道」と、「第一回学生設計コンペティション」に出品した「景色を受け継ぐ住宅」の2つについてその概要と設計の意図について説明します。

3 (1). 「POLUS—学生・建築コンペティション—」における「柵道のある道」の提案

住まいに関わる幅広い事業を展開する総合ハウスメーカーであるポラスが主催する、「POLUS—学生・建築コンペティション—」へ4人のグループで作品を提出しました(画像2)。与えられたテーマは「村」です。必要とされたものは、この建物を建てることによって生活が豊かなり、家同士のより良い関係が生まれる村を作りなさいというものでした。

設計にあたって、まずは村について考えました。私たちの中で村と聞いて共通したイメージは、人々が助け合っている村です。立ち話をしている大人、野菜を渡したり、もらったりする情景がありました。村には温かい人と人のかかわり方があったことに注目しました。

次に、昔の人の関わりと今の人の関わりについて考えました。昔は人同士の関わり方が密でした。縁側に自由に入ってきて会話をしたり、井戸端会議をしたりという近所付き合いや地域のネットワークが発達していました。しかし、現代の人間関係はSNSの発達により一番身近な近所関係はとて希薄なものになっていると感じます。その影響が出ていると考えられるのは住宅です。住宅は四方を柵で覆い、昔のように敷地内に入ることはおろか、どんな人が暮らしているかもわからない建物が多くみられます。そんな現代の問題である近所関係と人同士を遠ざけている柵を掛け合わせた建築「柵道のある村」を提案しました。私たちは柵が持っている敷地を区切る機能を残し昔にあった、自由に人の敷地を行き来できる空間づくりをめざしました。その結果、柵を柱のようにして人が通れる区間を設けることにより、空間を区切りながらも、人が自由に行き来できる新しい価値のある柵にしました。柵と住宅の間にスペースを取り、休憩や談話ができるスペースを設けると、個人か公のものかをあいまいにし、なりより村の住人と関係を持てるようにしました。

3 (2). 「第一回学生設計コンペティション」における「100年先も生き続けるライフデザイン住宅」の提案

不動産会社であるアサヒグローバルが主催する「第一回学生設計コンペティション」に3人グループで出品しました(画像3)。テーマは、「100年先も生き続けるライフデザイン住宅」です。三重県四日市市の一面に、分譲住宅10戸を計画するという内容で、なおかつ100年後も残る建物が求められました。私たちは、現在田んぼとなっている敷地を仮定しました。間取りは全て同じのものを基本として台所の勝手口に注目し設計を行いました。

まちを散歩していると見かける古びた看板や住宅の脇に置かれた割れた壺。これらは誰かが愛着をもち、残されてきたものでしょうか。このような世代を超えて密かに受け継がれていく物や景色が100年先も続くライフデザインにつながると考え提案しました。遠隔医療、生産性革命などによる長寿命化に伴い「100年人生時代」が目指されるようになり、三世代住宅の増加が考えられるようになりました。今より10年前に生まれた子供たちは、100歳まで生きるといわれています。そこで私たちは三世代住宅の生活を考え、勝手口のあり方に注目しました。勝手口は、酒屋さんが訪れたりゴミを出したりするところとして家事と密接した機能を持っていました。現代では機能なくなった勝手口が、2階3階とつながる構成とし、生活がにじみ出す空間を計画しました。各階の勝手口を、外階段でつなぎます。家事空間の延長である勝手口がプライベートな余剰空間に変わり各世代の特徴を反映する空間へと変化します。1階に住

む家族は庭の手入れ、2階に住む家族は趣味の釣り竿を置き、3階に住む家族はこどものおもちゃを置いたりしながら勝手口に各世代の景色を作っていきます。勝手口を利用する中で各世代の暮らしの背景を知り、モノから伝わる懐かしさや好みが新たな世代へと伝わっていきます。

以上の計画をもとに10戸の住宅をこのように配置しました。他住戸の気配が必ず感じられるように反転プランを2か所設けました。こうして重なった各住戸の勝手口により、敷地の中心に各世代・各家族の景色があふれ出す通りが現れます。しかし、これらの景色は勝手口によって作られるものではなく、各住戸内でのつながりがあることで生まれると考えます。断面はこのように、1階のLDKから2階、3階とダイニングキッチンを吹き抜けでつなぎます。そうすることで、勝手口とダイニング空間が一体となり、3世代が交流する起点となります。おじいちゃんにご飯を食べたり、こどもが遊ぶ声が聞こえたりと、3世代の会話が増えていきます。勝手口が開く度、家族の誰かが訪れる喜びや楽しみが増えます。勝手口が、この街区に100年先も生き続ける生活の景色を作り出します。

4. 最後に

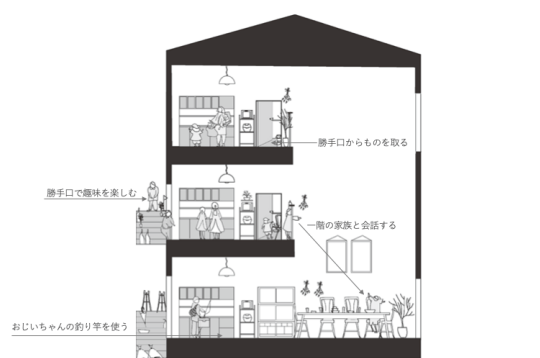
今回は、建築学科の同好会活動である建築同好会の研修内容とA C Tのでの優秀作品といった学外活動の紹介をしましたが、学内でも授業の中で設計の作品を日々取り組んでいます。



画像1. 建築同好会での建築見学の様子



画像2. 「POLUS—学生・建築コンペティション—」における「柵道のある道」の提案



画像3. 「第一回学生設計コンペティション」における「100年先も生き続けるライフデザイン住宅」の提案